

野生金糸猴のフィールド調査



農学部 1 年
井ノ上 綾音
中国

2016 年 9 月 4 日～
2016 年 9 月 29 日

渡航概要と内容

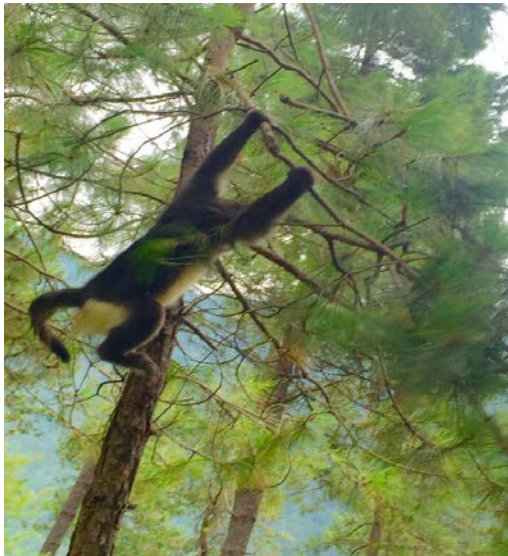
今回の渡航では、WRC の PhD の Liu Jie に協力してもらい、

- ・キンシコウの仲間である Yunnan snub-nosed monkey (*Rhinopithecus bieti*)の観察
- ・北から南に向かって、四川には、Sichuan snub-nosed monkey が分布し、長江を超えると貴州に Guizhou snub-nosed monkey、雲南に Yunnan snub-nosed monkey が分布、メコン川を越えると香格里拉では snub-nosed monkey は発見されておらず、サルウィン川を越えると Tokin snub-nosed monkey、Myanmar snub-nosed monkey が分布している。これは奇妙な分布の仕方であり、メコン川とサルウィン川の間に生息しているがまだ発見されていない、または生息していたが絶滅したかのどちらかのはずである。実際にこの地域に属する梅里雪山へ行って、ここの環境に絶滅させるような要因があるか、また現地の人への聞き込み調査をした。

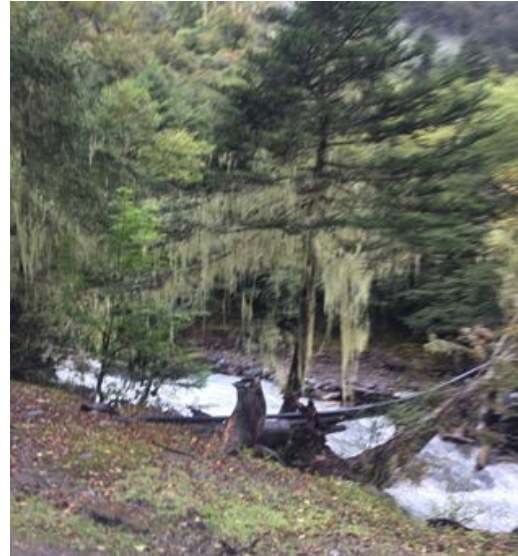
Yunnan snub-nosed monkey の観察として、まず Tacheng での餌付け群、そして Lijiang の野生個体群の観察を目的とした山行を行った。Tacheng で、初めて Yunnan snub-nosed monkey を観察する。厚い唇とまるっこい目が特徴的だった。Lijiang では、標高 3500 m ほどのベースキャンプから 4300 m まで 1 日 4 時間～9 時間ほど野生群を探す。高山で酸素が薄く思うように動けなかったせいもあるが、全部で 5 日間滞在して行ったが、一度も群れは見なかった。

梅理雪山では、3000 m－3600 m にかけて snub-nosed monkey が主食とするサルオガセは豊富にあったので、絶滅したと仮定すると、食料が原因ではないだろうということが分かった。気温も気候も、高度も環境も他地域に生息する種と同じ条件にあるように思われたので、この地域でだけ絶滅というのは、とても奇妙に思われた。また、4000

mほどの山小屋で、管理人の人に話を聞いたところ、2, 30頭ほどの黄色い毛のサルの群れを4月と5月に一度ずつ見たことがあるとのことだった。これは、来年、再度行き、観察、聞き込みによって確かめようと思う。



Yunnan snub-nosed monkey (Tacheng)



サルオガセ(梅里雪山 3200m くらい)

渡航を通じて感じたこと

Lijiang での観察では、高度の高い山を歩き回ったものの、一度も野生群を見つけられず、残念だった。しかし、自然相手のフィールドワークはそういうものだと教えてもらった。5年間、山での調査をしているという Liu Jie は、4000mの酸素の薄い中、獣道のような登山道を走りあがっていたり、熊や毒蛇に対する知識、サバイバル技術の豊富さなど、経験の強さを感じた。動物による危険が多く、非常事態などに対して、事前に検討して準備万端にしたりはせず、サバイバル技術で乗り切るなど、いつもの山行とは違う味わいがあった。その分危険も多いが、わくわくもした。梅里雪山では、現地の人との意思疎通が上手くいかないことがあるなど、フィールドワーク調査ではありそうな困難も経験できてよかった。Yunnan snub-nosed monkey の観察はもちろんとても魅力的だったが、その過程で、現地の人との出会いもあり、綺麗な景色を楽しみ、サバイバル技術を学び、実践するなど楽しい経験がたくさんできた。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

・ともかく体力をつける。フィールドワークには体力がとても重要であることを、今回体をもって知った。

- ・日本の森と他国の森では、気を付けなければいけないことが全然違う。(例えば、毒ヘビ。日本では、ヒトを死に至らせるほどのヘビに出くわすことはほとんどないが、雲南の山には、多くの種類の猛毒を持つヘビが多くいる。毒ヘビの見分け方、山道を歩くときに噛まれることを避ける歩き方、行ってはいけない場所などの知識を教えてもらった。)
- ・サルが住んでいないと思われていた高度、地域でサルを見かけたことがあるという現地の人があった。真偽のほどはわからないが、とても興味深く、その地域に密接している現地人の情報は重要であることを知った。
- ・日本語も使えず、環境も全く違い、大変なこともあったが、現地で自分の目で動物やその動物の住む環境を観察し、体験することはとても魅力的で楽しかった。現地の人や食べ物、環境を経験できることもフィールドワークの楽しみの一つだなと思った。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *現地交通費
- *宿泊費・食費
- *その他諸経費 など